

異文化理解と外国語教育の linkage

森 田 信 也

はじめに

1. マルチメディアの功罪
 - 1.1 訳読式の功罪
 - 1.2 文明の利器
2. 英語の授業と異文化理解
3. 社会変化と風習・風物詩
 - 3.1 暦
 - 3.2 風習の変化
4. 言語が内包するもの
5. 変わるもの変わらないもの
 - 5.1 イギリス
 - 5.2 フランス
 - 5.3 国境の町
 - 5.4 ヨーロッパにおける英語事情
6. おわりに

はじめに

中学生になって、教科ごとに専科の教員が担当する授業のうち、最も印象深いのは英語の授業であろう。日本語には存在しない子音や母音から感じる音声的な新鮮さもあろうが、何よりも、初めて触れるアルファベットというものに異文化を感じずにはいられなかった経験は、誰もが記憶にあるはずだ。ペンmanshipという練習帳にブロック体をマスターしたら、次は筆記体を習い、筆記体で自分の名前が書けた時の喜びといったら、有名人にでもなったような心もちで、教科書やノートに筆記体で自分の名前をむやみやたらに書いたものである。

また、大学生になって、はじめて第二外国語を習った時の新鮮な感覚を思い出してみたい。例えば、フランス語では、お決まりの *Qu'est-ce que c'est?* というフレーズならば、「ケスクセ」というその発音が、どこか下品な日本語のようにも響き、教室は笑いに包まれたものだ。さらに、日本においてもフランス産のブランド名が徐々に知られるようになってくると、自動車の *Renault* な

どは、文字がやたらと多いわりに発音は「ルノー」と短く、啞然としたものである。これらも立派な異文化との最初の接点といえるだろう。

さて、中学校で出会った英語だが、スムーズに離陸できた者を除いて、たちまち失速して、英語嫌いになる者もおれば、他方、ますます英語が好きになり得意とする者も出てくる。同様に、大学では、ヨーロッパ語の第二外国語の授業の教室でもまた、4月の新鮮な空気はたちまちどこかに消え、男性名詞、女性名詞に加え、一般動詞が英語の be 動詞のように全て人称変化することに気が遠くなった経験は今となっては懐かしい思い出だろうか。

その一方で、たとえ英語が嫌いでも、ビートルズやカーペンターズは好んで聴いていたり、1970年代前半は、まだアメリカ臭が漂っていたマクドナルドのハンバーガーは大好物だったり、大なり小なり異文化との接点を持っていた者も多かったように思う。このように、外国語との接点は、何も純粋に語学的な側面だけではなく、日常的、社会的、精神的な部分でも少なからぬ影響力を持っていたと思う。近年では、インターネットが普及したことで、逆に「新鮮さ」が失われてしまったような側面もあり、ひょっとすると、この便利な道具こそが、語学習得の大きなマイナス要因にもなっているような気がしてならない。そこで、本稿では、異文化理解と外国語教育を我々の置かれている環境という視点から考察し、一般の語学の授業の中で「異文化理解」の取り上げ方について考えてみたい。

1. マルチメディアの功罪

昔は、インターネットやビデオなどという文明の利器は存在せず、ましてや CD や DVD は言うに及ばず、カセットテープが出てきた時は、革命的とさえ思ったものである。また、外国語の授業で「リスニング」という観念を重視するようになったのも、つい最近のことである。昔の授業はリーダーの教科書をひたすら訳して、文法事項を一つ一つ習うというものであったから、リスニングなどというものは、教室で体系的に習ったためしがない。それにもかかわらず、英語検定の試験では、必ず聴解試験もあったのだが、昔は「リスニング」とは言わずに、「ヒヤリング」と言っていた。

また、発音も体系的に習った記憶はなく、日本語のアイウエオの5つの母音を適当に当てはめて発音したり、場当たりの、耳で聞こえた通り適当に調整して、鸚鵡返しにごまかして済ませていたという者も多いではなかろうか。それでも、高校や大学の入学試験では、いわゆる「発音問題」が必ず出題されていたので、実際に正しい発音が可能かどうかは別として、「目で見て」、「活字を通じて」発音の違いだけは認識していたかと思う。

それに比べて、現代では、CD 教材で正しい発音を常に耳にすることも出来るうえ、CD の辞書や電子辞書にも発音機能が備わっていて、正しい発音を聞くことが可能だ。昔の学習者とは雲泥の差である。

ところが、最近の義務教育のカリキュラムでは、発音記号も筆記体も消えてしまい、発音の勉強としては理想的な「耳学問」をもっぱら行うことになるのだが、電子辞書や CD 教材が適材適所に正しい発音を常時提供してくれるわけではない。初めて出会った単語を辞書で調べて、その発音記号で正しく発音することが出来ない英語学習者を大量生産している現状は、まさに文部科学省の責任である。

1.1 訳読式の功罪

中学校や高校の教育課程が大幅に変わり、中学では筆記体を習わなかったり、高校ではリスニングを積極的に取り入れる学校も増えたり、さらには、ネイティブ・スピーカーの補助教員を登用して、オーラル・コミュニケーションを重視した授業時間が増加してきた。

その一方で、教科書で扱う語彙数や文法事項が削減されて、中学・高校で習う内容はかなり減らされてしまっている。その影響であろうか、ここ数年の大学生の傾向として、TOEIC を受験した場合、リーディングセクションよりもリスニングセクションの方が圧倒的に得点が高いという現象が見られるようになってきた。昔は、留学をするために TOEFL を受験すると、リーディングや文法では高得点をあげられても、リスニングの点数を上げるのに大変苦労した経験を持つ者も多かったかと思う。

この現象は近年、特に顕著で、困ったことに、授業で TOEIC のリスニングを扱う際、スクリプトを見ても、簡単な構文や文法事項でさえ理解できないために、意味を理解することが出来ない学生も多い。中学・高校を通じてリスニングに多少親しんでいるため、リスニングに対する抵抗感が少ないことは評価すべきことではあるが、オーラル重視の英語の授業を展開するのであれば、週に 1 回程度の補助教員の参加する程度の授業では焼け石に水で、かえって文法事項やじっくりとリーディングをする時間が削られてしまい、虻蜂取らずになりかねない。

他方、訳読中心の授業では、文法事項の習得には都合が良い反面、速読やリスニングに対する効果という点で即効性は少ないが、少なくともスクリプトを見れば、ほぼ 100% 英語を理解できる程度の英語力は身に付くというメリットもある。本来、語学の習得ということ言えば、リスニングもリーディングも両方出来て初めて「マスター」したと言えるのだが、どちらかは得意でどちらかが苦手というのは、非常に歪んだ状態であり、音声と活字とをシンクロさせながら習得するのが理想ではある。ところが、公立学校のカリキュラムでは、英語に何時間も費やすことは不可能なので、オーラルが導入された分、実質的に正課の時間が減り、語彙数も学習内容も減ることになる。中途半端なオーラル導入は、かえって中級の壁を突破するブレーキにさえなっていると思うのである。

それでは、徹底した訳読式の教育を受けた者がプラクティカルな英語が不得手かということ、必ずしもそうとは限らない。先日偶然見たテレビドラマの中で、旧通産省の官僚がアメリカのコンピュ

一タ会社の代表と輸入自由化と国内産業の保護で駆け引きをする場面で、通訳が退席した後、辞書を引きながら筆談をして、見事に意思を疎通させるという一幕があった。これもまた立派に実用的な英語力なのではないかと痛感した。徹底した訳読式の教育を受けていたからこそ、辞書を頼りに、表現したいことを伝えることができたのではないか。中途半端なオーラル教育を受けていただけでは、到底おぼつかなかったことであろう。思うに、昔のカリキュラムでしっかりと詰め込み学習を余儀なくさせられた世代の官僚たちは、リスニングやスピーキングがそれほど出来なくても、十分に英語の能力があり、海外留学の機会を得れば、プラクティカルな側面は後から十分におつりが来るほどだった。

1.2 文明の利器

それでは、文明の利器が発達した現在、CD や DVD やパソコンで学習できる上に、学習ソフトや教材も工夫が凝らされて、非常に充実した好条件のもとで、カセットも無かったような昔と比べて、語学力は格段に進歩しているかという、むしろ語学力は低下しているとさえ思える。もちろん、アポロ11号の月面着陸の同時通訳を行った西山千のように米国生まれのバイリンガルもいたが、小松達也、国弘正雄、村松増美ら英語の達人と呼ばれた人たちは日本生まれの日本育ちで、日本で教育を受けた人たちである。しかも、当時はせいぜいオープンリールが使えればいい方で、進駐軍の兵士に中学の教科書を音読してもらって発音を勉強したり、映画館で懐中電灯を片手にスクリプトを追いかけてリスニングを学んだという。

その後の世代では、洋楽のレコードや FEN など英語に親しむ機会が恵まれたが、カセットテープに録音して、巻き戻して何回も繰り返して聴くことが出来るようになったのは、昭和40年代になってからである。教材も教科書ぐらいしかない時代は、教科書を隅から隅まで頭に入れるしかなかったのであろう。かえて、基本的なことがしっかりと腹に入って血や肉になり、英語をマスターすることが出来たのではないか。「読書百遍、意自ずから通ず」ではないが、英語教育云々と理論だけが先走っている昨今、もう一度、基本に立ち返り、音読を繰り返す寺子屋式復古ということをアンチテーゼとして推奨したい。

ところで、昨今は、ゲーム感覚で、インターネット上でも英語学習が可能になった。CD 付きの教材も書店に山積みになっている。DVD の教材も多く開発された。映画の DVD は言語選択の調整でキャプションを表示することも可能になった。こんな恵まれた条件がそろっている割に、語学力が飛躍的に向上しないのはなぜなのだろうか。その原因こそ、インターネットなのではないかと思うのである。その証拠に、インターネット上には、オンライン翻訳というサイトも多く存在するが、どれをとっても満足なものはなく、安易に利用すれば、学生を一層退化させてしまうことにもつながるばかりではなく、文法・語法無視の直訳英語は、非常に危なっかしいのである。

2. 英語の授業と異文化理解

それでは、中学一年生で初めて英語を習った時のような「異文化理解のインパクト」に匹敵するようなもので、大学の教室で再びモチベーションとなるようなものを考えてみたい。

まず、英語という言語に内包される異文化という要素は、例えば、フランス語、ドイツ語などの言語に比べると、学生が「言語の匂い」を嗅ぐ場合、非常にその匂いが希薄であることは否めない。フランス語には、料理やファッションは言うに及ばず、ブランド名のつづり字のアクセント記号まで、非常に「フランス臭」というものが際立っていて、異文化が内包する「コンテンツ」は、とりわけ初学者には非常に新鮮に感じられる。

一方、英語という言語は、中学や高校でさんざん勉強して手垢のついた言語で、異文化が内包する「コンテンツ」といっても、ハロウィーンやクリスマスといったキリスト教的な祝祭に関するものなどは、日本社会においても、すでに日常化しており、いまさら大上段に振りかぶって取り上げるようなものでもないかと思う。昨今では、高等学校でも AET/ALT などのネイティブ・スピーカーを多数採用して、英語教育に参加させており、その際に、中学や高校でもハロウィーンが紹介されたりしており、学生の方も、「もうハロウィーンは飽きた」という気分が漂っている。

日本ではまだ馴染みの無い「復活祭」なども紹介したいと思うが、キリスト教国ではない日本においては、学生も実感が無く、うまく扱うことがなかなか難しい。

一方、フランス語となると、1月6日の顕現祭に食するガレットの中に、小さな陶器の人形が入っていて、切り分けて誰が当りになるかなどという話しは、キリスト教の祝祭に加えて、学生に紹介する「異文化」という付加価値が非常に大きい。しかも、語学の授業の中で取り上げる場合でも、galette des Rois とか fève des Rois (公現祭のそら豆) など、キーワードにも言及できるし、フランス語の galette や fève という語の意味の多様さは、異文化という切り口でフランス語の授業の中で扱いやすい。

そもそも昔は「異文化理解」という確立した概念は意識されず、大学の一般教養の英語では、もっぱら訳読が中心で、テキストの英語の内容はかなり高度に知的内容を含んでいて、その中にこそ異文化理解の各論が散りばめられていたような気がする。そして、担当の教授のよもやま話の一環で、海外遍歴の「自慢話」などがしばしば飛び出してきて、その断片を聞いて想像を膨らませるというのが、今思えば異文化理解の「初めの一步」という感じであった。

例えば、ポール・ギャリコの短編「白雁」や「小さな奇跡」などを読むと、ドイツ軍に追い詰められた第二次世界大戦のダンケルクの様子やバチカンの近衛兵はスイス人であるとか、そういう所から世界の様々な出来事や知識を断片的にはあるが得ることができ、しかも、そういう話というものは、他のことは忘れてしまっても、数十年経た今でも案外覚えていたりするのが不思議である。

さて、現在の英語教育においては、「文学作品禁止令」が出されて、もっぱら、TOEIC やら英会

話やらビジネス英語などが幅を利かせている大学も少なくなく、このよう授業の教材にはどうも、異文化理解のコンテンツが絡みにくい。リスニングさえ取り入れていれば、何か「今様」の英語教育とでも言わんばかりで、薄っぺらなテキストで幼稚な内容のリスニング教材が巷にはあふれ返っている。いきおい、内容も薄っぺらにならざるを得ず、単純な内容を問うような設問ばかりになってしまう傾向がある。

TOEICなどのビジネス英語がらみの教材でも、社内での事務連絡的会話内容などは、いつ、どこで、何が、どうなる、などの英語技術を主に扱うような構成になっていて、ここでも異文化理解という要素とは絡みにくい。

もうひとつ、重要なのは、教室の学生の英語力も重要な要素である。下位のクラスでは、語学そのもののテクニク的な修練（特に、語彙力）を中心にせざるを得ないので、テキストを選ぶにしても、英語も内容も簡単なものになってしまいがちで、英語の解釈などの技術面の説明が中心になってしまい、なかなか、掘り下げた内容などを扱うには時間的にも制約があって難しい場合が多い。

しかしながら、英語力が低い学生にとっても、よもやま話して聞く異文化理解の具体例は、授業評価アンケートの自由記述欄にも、「語源の話しが新鮮だった」とか「フランス人がバゲットを食べるときは、必ず縦方向に二等分してバターを塗るという話しが印象に残っています」とか、「欧米ではマスクをして歩いている人など居ないと聞いたが、実際に旅行に行ってみたら、本当だった」などというテキストに関係ない内容であっても、しばしば「好意的」な記述が見受けられる。

そこで、どのように、異文化理解を盛り込んで行けばよいかという本題に入るわけだが、特効薬というものはない。第一、異文化理解の教科書というのが、一番危なっかしいからである。非常にステレオタイプな例を列挙し、日本の場合と比較するような例題が多いのであるが、おおかた時代遅れで、一般的でないケースが取り上げられている。現代ヨーロッパ社会の変化は、想像以上に早く、活字で出版された時には既に時代遅れになっているケースも多い。おまけに、アカデミックな対象以外のことはシステムティックに扱われることが少ないから、一層その傾向が強い。だから、いまだに「イギリスの飯は不味い」など言っていたとしたら、それはとんだ大間違で、相当な時代遅れと言わざるを得ない。

3. 社会変化と風習・風物詩

この議論の突破口として、日本語と日本文化ということで例を挙げれば、昨今のIT化、核家族化、住宅事情の変化など日本社会のパラダイムの転換に伴う諸変化で、若い世代にはなじみの無い「風物詩」も多数あろう。例えば、正月の雑煮が廃れるということは無いだろうが、鏡開きの餅を金づちで割って揚げ餅にしたりする家は、平成の世にどれくらいあるだろうか。カレンダー上に依然として残っている風物詩、節分に豆をまく、お彼岸におはぎを食べるとか、土用の丑の日に鰻を

食べるとか、かろうじて習慣化しているものもあるが、節分に柵の枝に鰯の頭をくっつけて玄関先に置く家などは、いったいどのくらい存在するだろうか。「鰯の頭も信心から」という格言を全く解さぬ世の中も程近いのではないか。また、カレンダー上には明記されていない「旬の感覚」に至っては、風前の灯ではなかろうか。5月の初鯉などは、「目に青葉山ホトトギス初鯉」という俳句が日本人でさえも、皮膚感覚で感じられなくなってしまう日も近いのではないかと危惧される。

冷蔵・冷凍技術が発達し、また、温室栽培も盛んな昨今では、「旬の感覚」というものが薄れつつあるのは否めない。それでも、たけのこ、そらまめ、新ショウガなど、旬のものは季節感を養い、自然の移ろいを感じる繊細な感性を育むのに不可欠である。

日本には桜の花を愛でる「お花見」という習慣がある。3月になると天気予報では、開花や満開の予想が盛んに報じられるが、こればかりは冷凍も保存も利かないので、満開の下での花見と桜吹雪は、まさにその時、その場所でなければ、体験できない「生の桜」だからこそ、日本人の DNA に訴えかけるのである。対照的に、ヨーロッパには桜前線こそ存在しないが、「ホワイトアスパラ前線」は存在する。マルシェに地元の白アスパラが並ぶ日を首を長くして待っているのが、ヨーロッパ人の DNA に根ざしたものだ。

3.1 暦

2009年7月22日は日本でも、硫黄島やトカラ列島で皆既日食が見られた。旧暦では一日が必ず新月になり、皆既日食が起こるのは必ず旧暦の一日であった。十五夜の月といえば、満月のことをさす。旧暦では、新月から数えて15日目に満月となるので、日付と月の大きさが対応していた。十五夜という言い方は、太陰暦の名残だが、現在も辛うじて通じるであろうか。

古代ローマの暦も太陰暦だった。そこで毎月の暦のポイントとなる日が、一日を意味する *Kalendae*、月によって5日目または7日目を意味する *Nonae*、同様に13日目あるいは15日目を意味する *Idus* という語彙がキーワードとなる。

古代ローマの暦では、月の一日を意味する *Kalendae* という語は、Varro の *Lingua Latina VI*, 27 では、

Primi dies mensium nominate Kalendae, quod his diebus calantur eius mensis Nonae a pontificibus, quintae an septimanae sint futurae,

「各月の一日を *Kalendae* と呼ぶが、理由は、この日に聖職者たちが、今月の *Nonae* は5日目か7日目かを（群衆に向かって）叫ぶからである」とある。

また、Ernout et Meillet (2001: 86) にも、

Rattaché par les Romains à *calo* « appeler, proclamer »

とあるように、ラテン語の *calo* 「叫ぶ」という語と語源的に関連があると思われる。さらに、Ernout et Meillet (2001: 88) では、

Ces mots sont apparentés à une série de termes divers indiquant des « cris », des « bruits » et peut-être des élargissements tels que lat. *clamo*, *clango* ; en somme, l'ensemble des mots expressifs présentant kr-, kl- à l'initiale pour indiquer des bruits.

という記述が見られ、Kalendae の語頭の /kal-/ という音は、「音」と関係があり、毎月一日にその月の半月や満月を市民に口頭で知らせていたというところから、「一日に叫ぶ」が「カレンダー」の語源となったとするものである。

Nonae については、Lewis and Short (1993: 1215) に、

the nones, so called because it was the ninth day before the ides とあり、さらに、After the expulsion of the kings, the market-days were no longer allowed to fall on the nones, because the people celebrated the nones as the birthday of Servius Tullius, and fear was entertained of a movement on that day in favor of royalty (Aurelius Theodosius Macrobius, “Saturnalia” I, 13)

という記述が見られ、Nonae がそう呼ばれる理由は、国王の追放の後には、nonae に当たる日に市場が立つことを禁止した。その理由は、ローマ市民は nonae には Servius Tullius の誕生日を祝う習慣があり、当日は、王に畏敬の念を抱くのが習慣だったからである。また、Lewis and Short (1933: 1215) :

No wedding took place either on the nones or on the ides, because the following day was a *dies ater*, unfavorable for the offering to be made by the bride (ibid. I, 16)

では、古代ローマ社会では、nonae と idus には、結婚式を行うのが忌み嫌ったとある。理由は、その翌日に、新婦が供物をするのには忌み嫌う日だったからとある。さらに、

Augustus, for superstitious reasons, avoided undertaking anything on the nones, (Suetonius, Octavius Augustus Caesar, 92)

では、アウグストゥス帝は、*nonae* の日には、迷信的理由から、物忌みの日としたとある。

これら上記の記述は、ラテン語の辞書 (Lewis and Short) に記述されている事柄であり、語学と異文化理解の linkage を如実に示す例とも言える。これらの、タブーは、現代の日本の「仏滅」や「友引」にも通ずるものがあるが、日本でも中古の人たちの生活は、かなり徹底的に陰陽道の影響を受けていたようだ。例えば、『土佐日記』には、

「爪のいと長くなりたるを見て、日を数ふれば、今日は子の日なりければ、切らず」

という件がある。藤原師輔の『九条殿御遺誡』によると、丑の日には手の爪を切り、寅の日には足の爪を切るようになっていたという。子の日なので、あと一日で丑の日だから切らなかったというわけである。現代の日本人には失われたタブーである。

最後に、ラテン語の *Idus* の語源であるが、Ernout et Meillet (2001:306-7) では、

les ides, division du mois qui tombait le 15 en mars, mai, juillet, octobre, et le 13 dans les autres mois. L'explication ancienne par une racine indo-européenne signifiant « briller » (il s'agirait de « nuits claires, en pleine lune »)

とあり、古代ローマでも3月、5月、7月、10月は31日の月だったので、15日目を *Idus* と呼び、満月の日であった。大まかに、31日の月の翌月は7日目に半月、13日目に満月となった。Lewis and Short (1933:878) では、エトルリア語の *iduo* “to divide” との関連から「月を(2つに分ける日)、半月」という意味の派生に言及している。

また、Varro の *De lingua latina* VI. 28 では、

Idus ab eo quod Tusci Itus, vel potius quod Sabini Idus dicunt.

とあり、エトルリア人が *Itus* と呼んでおり、サビニー人は *Idus* と呼んでいたのがその起源であると述べている。

Lewis and Short (1933 : 878) では、サンスクリットとの関連で、*indh-* および *indh-* “to kindle, lighten” との関連にも触れ、「月明かりの日」=満月(十五夜)という記述が見られる。しかし、Ernout et Meillet (2001: 306-7) では、

L'explication ancienne par une racine indo-européenne signifiant « briller » (il s'agirait de « nuits claires, en pleine lune », a été abandonnée parce que la racine est la forme *aidh- dans les langues occidentales.

という語源的な解説が見られ、印欧語根の*aidh-は「燃える」という意味で、「輝く」という意味ではないという説を採っている。

このように、日本語では、「十五夜」は辛うじて現代語にも残っているが、ラテン語の Idus は、ロマンス語では使われなくなってしまった。これも地中海世界の太陽を重視する国民性の象徴からであろう。しかし、古代ローマにも忌避日というものが存在し、日本の平安時代の陰陽道に通ずるものがあったり、現代は廃れてしまっているタブーなどは、太陰暦という共通点にそのよりどころを求めることができよう。そうしてみると、日本語の「十五夜の月」というのは、なんと長生きをしている語彙だろうか。

ところが、キリスト教の復活祭は、太陰暦によって定められているので、復活祭の日が毎年変わるのには、そのためである。ヨーロッパの大学の学年暦は、年ごとに復活祭の日の変動に伴い、復活祭休暇の期日が大きく変動する。非常に煩瑣なのだが、依然としてこの仕組みは健在である。太陰暦が現代の暦にも生きている例である。

3.2 風習の変化

正月の行事も昔とは随分変わった。集合住宅が増え、スーパーマーケットや量販店ばかりが優勢な現代においては、正月の餅を米屋に注文する家などほとんどなかろう。それでも、現代のカレンダーにも、依然、昔の風習が暦の上でのみではあるが、随分と残っている。例えば、節分、衣替え、七夕、土用の丑の日、お盆など現在でもなお行われている風習も多い。他方、ごくたまにはあるが、1月16日と7月16日の欄に「蕪入り」と印刷されているカレンダーもあるが、こちらは盲腸のようなもので、若い世代には意味も分かるまい。そのうち、国語便覧にも解説が載る日も近かろう。既に半分は古典の域であろう。

社会のあり方が変わって、正月の準備や過ごし方も昨今では大きく変わってきた。昭和40年代まではスーパーはほとんど存在せず、野菜・果物は八百屋、魚は魚屋、肉は肉屋、豆腐は豆腐屋、乾物は乾物屋、米は米屋、牛乳は牛乳屋と相場が決まっていた。当時は、商売をしている家では、12月31日は早仕舞いをして、元旦から1月5日（あるいは7日）ぐらいまではどの店も正月休みであったから、年末になると、八百屋では、みかんは箱ごと注文し、正月用の野菜などを大量に買い、配達をしてもらうというのが一般的だった。そして、年末になると、しめ飾りや門松を売る屋台が出て、「一夜飾り」は良くないからと、遅くとも30日までにしめ飾りを買ったものだった。

マンション住まいでは、門松を置くスペースもないし、しめ飾りを玄関先に掛ける者もほとんど

居ないのが現状で、「一夜飾りは良くない」などという昔の「常識」ですら、現代では通用しなくなってきた。

決定的な違いは、元日から営業している店が増えて、いまや当たり前になりつつある。コンビニエンスストアは365日24時間営業である。もはや盆暮れ正月もあったものではない。これに比べると、ヨーロッパのクリスマス当日は、イギリスでは鉄道・地下鉄・バスは全面運休で、商店もデパートも休業である。フランスの各都市でもバス・トラムは終日運休で、デパートも休業なのだが、アラブ系のレストランや商店は営業している。イスラム系の移民が多いフランスでは、こうした共存のお陰で、何も知らない旅行者がひもじい思いをせずに助かったりもする。しかし、最近の観光地では、クリスマスでさえも、営業するレストランが出現しつつあり、サルゴジ大統領は日曜・祝日のデパート営業を積極的に進めようとしている。これはまさに現在進行形である。

さらに、主食に対する意識も近年では随分と変わってきたようである。日本人なら、秋に新米が出るのを首を長くして楽しみにしていたものだが、最近では、保存技術が格段に進歩しているので、古米はもはや古米ではなくなりつつあり、コンビニエンスストアには、365日24時間、白米や弁当が並び、ブランド米で作ったおにぎりの専門店が繁盛し、電子レンジのバックご飯もある。新米が秋の楽しみという感覚が年年歳歳失われつつあるのではないか。こちらも現在進行形である。新米が出て、食欲の秋などと喜んでいるのは中高年だけかもしれない。最近では、専門の米屋も軒並み減って、米は量販店やスーパーの安い米を買うという向きが多いと見える。主食の米にもかかわらず、国は減反を進め、輸入自由化を進めたり、大切な米をないがしろにしているのかとさえ思えるほどである。

それに引き換え、フランスでは、パン屋は依然一種の「国策」とでもいうべき位置を占めている小売店であろう。フランス各地では、パン屋の定休日は近所の3～4件のうちでA店は月曜日、B店は火曜日、C店は水曜日といったように、毎日必ず近所で、どこかのパン屋が営業しているように取り決められている。5月1日でさえ、地域に一軒は午前中のみ必ず営業するパン屋があり、大げさに言えば、自由にバカンスを取れず、もっと大げさに言えば、国に「接収」されたと嘆く経営者も多い。バゲットは朝、夕二回焼く店が多く、焼きたてのバゲットは、日本人にとっての炊き立てのご飯のようなものである。グルメなお国柄を反映して、朝、夕に焼き立てを買いに行くこだわり派も居れば、スーパーに陳列されたバゲットで済ましてしまう家庭もある。パン屋の自家製バゲットは添加物が無いので、翌日には石のように硬くなってしまいが、スーパーで大量販売されているバゲットは硬くならないように作られているからだろうか、明らかに味が落ちる。パン屋は国を背負う商いと言っても過言ではない。日本人の米離れと対照的である。ただ、日本人も「魚沼コシヒカリ」にこだわったりする者がいるように、パリでは、わざわざポワラーヌのパンで作ったりエットのサンドウィッチとメニューに謳うカフェもあるほど、フランス人にはパンにこだわっている

輩が多いのは確かである。フランスのパン屋が定休日や夏休みを地域のパン屋同士で取り決めて、国民が困らないようにという配慮は、昔の日本でも銭湯がそうしていたように、一種のギルドの職業意識に根ざしたものである。日本では効率・経済優先でこうした職業意識とか誇りとかいうものがすっかり廃れてしまったが、どっこいフランスでは依然健在なのである。

4. 言語が内包するもの

在外研究で留学したストラスブール大学で日本語を教えている先生方と交流したとき、日本語のテキストには、「お雑煮」とか「お餅」とか「豆まき」などという風物詩も紹介されていて、異文化と語学教育が非常に密接に結びついているという印象を強く持った。昨今のフランス人学生で日本語を学ぼうという向きには、日本の誇る「アニメ」や「マンガ」という強烈な求心力のある「異文化」という核が存在している。日本語を学ぶ強い動機になっている。

言葉と文化が不可分のものであるという点においては、中学・高校で古文を学ぶ際に用いる「国語便覧」という補助教材が代表的なもので、「十二単」や「束帯」などの図解を見ながら、古典の解釈をする時には、文法だけではなく「異文化」を扱う必要性はつまびらかである。

同様に、ラテン語を学ぶときも、ギリシャ語を学ぶときも、動詞の活用や名詞・形容詞の屈折を覚えるという作業が中心になるのは言うまでも無いが、toga「トーガ（古代ローマ市民の着たゆるやかな外衣）」という語彙は、図解入りで辞書に必ず取り上げられている「異文化」的項目である。つまり、テキストを読むときに、シンタックスや文法そのものが非常に重要なことは言うまでも無いが、必ず不可分なものとして「異文化」的内容を含んでいる。

先ほど取り上げたラテン語の *nonae* という語彙の説明に、古代ローマ社会では忌避日だったという記述が語学の辞書に記述されていたのを紹介した通り、平安時代の陰陽道と同じく、語学的解釈に加えて、精神的な解釈も必要なのである。これこそが、異文化理解の本質ではないだろうか。

ヨーロッパでは、キリスト教の影響で、これも一種の忌避日という意識からか、今でも金曜日は、大学の学食や市中のレストランの *Plat du jour*（本日の日替り料理）は必ず魚料理になる。ヨーロッパでは金曜日は魚の日と相場が決まっている。これは言語を問わず、イギリスを含む欧州のキリスト教圏にほぼ共通している。

それでは、英語の場合はどうかといえば、「英語圏」の英語という言語は、既に文化的に内包するコンテンツというものが一律に存在するとは限らない。とりわけ、我々日本人が隣国の韓国や中国の人たちと会話をする場合、中国語やハングルを話す人を除いては、「英語」で用を足すことになるわけで、その場合の英語は単なるコミュニケーション・ツールであり、アメリカ文化もイギリス文化も内包していない。従って、英語を学ぶという場合、必然的に付随する「異文化」の要素は、アメリカ、イギリスという範疇における狭い範囲の「異文化」という「歴史」や「宗教事情」など

の各論を扱うケースが非常に多い。思うに、学習参考書も「文法事項」や「語法」などが記述の中心となり、語学の授業で扱おうとすると、システムティックな取り上げ方は非常に難しい理由がここにあるのではないか。

別の観点から「異文化」を眺めてみると、本国に比べて、古い習慣や古い語法などは、植民地や僻地で永く残る傾向が強い。ハロウィーンなども、もともとはカトリックの守護聖人という観念を伴わなければ「万霊節」自体が成立しなくなるわけで、アメリカ本土で独自の発展を遂げた部類である。近年、カトリック国のフランスにも「ハロウィーン」が逆輸入され、10月になるとチョコレート屋がこぞってハロウィーンの jack-o'-lantern を飾り、露骨な商業主義に走ってチョコレートを売る光景がここ数年定着してきた。フランスでは、4月1日の poisson d'avril で魚の形をしたチョコレートの中に小さな魚の形のチョコレートを詰めたものや、復活祭のときのうさぎの形や卵の形の大きなチョコレートが店頭にずらっと並ぶのは、風物詩である。それに加えて、ハロウィーンもコマースリズムに乗じて売り出しの機会を創出したわけだが、これなどは、フランス語に根ざした風物詩でも異文化でもなんでもない。守護聖人はカトリックでは大切な要素であるから、朝の天気予報でさえ「今日は～の日です」と必ずアナウンスするし、新聞にも必ず記載されている。もちろん、フランスの手帳には、毎日の守護聖人が印字されていて、これは「異文化理解」の守備範囲である。

5. 変わるもの変わらないもの

近頃、「儀式」めいたものが洋の東西を問わず、省略される傾向にあるのではないだろうか。日本では、「後の掃除が面倒だから、豆まきは控えている」などという若い母親も居るとかで、こうした手合いが増えてくると、節分そのものが消えて行きかねないではないか。カトリックの聖体拝領も一般信者は聖餐式では、キリストの肉としてホスチアは拝領するが、血としてのカリスの拝領は省略である。一方、英国国教会では、一般信者もホスチアはもちろんのこと、カリスも拝領する。カトリックと袂を分かった英国国教会では「古い儀式」が保たれているとも見ることができよう。その一方で、フランスでは朝の挨拶で、男女間、女性同士では、両頬を触れ合うキスを交わし、男性同士、親しくない男女間では握手を交わす「儀式」がいまだに健在である。郵便局に朝一番で乗り込むと、接客中の職員が、接客を放り出して、後から窓口に着いた同僚と「朝の儀式」を行わないと一日が始まらないわけで、接客よりも「儀式」優先の国民性は依然健在である。

5.1 イギリス

「イギリスの飯は不味い」というのは、もはや非常識である。1990年代になると、テレンス・コンランがシャッドテムズの再開発で、お洒落なレストランのプロデュースを皮切りに、フランス料理やイタリア料理を取り入れたモダン・ブリティッシュという新たなジャンルを創作し、見た目だ

けではない味も良い料理を提供するレストランが雨後のたけのこのように出現した。

それ以前は外食といえば、せいぜい移民の営業する不味い中華料理、ごく平凡なインド料理、塩辛いイタリア料理ぐらいで、それ以外でマシなものと言えば、パブで出されるフィッシュ・アンド・チップスぐらいのものだった。1980年代のサッチャー時代の構造改革が功を奏し、90年代に入ると、経済が好転したこともあって、再開発に伴って、外食産業が大いに花開いた。好景気に伴い、イギリス版ヤッピーが出現し、彼らはパブでビールを飲む代わりに、Modern Britishのお洒落なレストランで、シャンパーニュやワインを飲むようになり、さらに1990年代後半になるとジェイミー・オリバーなどの若手の料理人が現れ、外食産業は一層進化を遂げることになる。これに伴い、旧来のパブは廃れ始め、若い世代は、パブでビールを飲むよりも、ワインを好み、2000年代に入るとロンドンの中心部の昔ながらのパブは次々に閉店し、代わって内装もモノトーンでグラスワインを出すような店に生まれ変わって行った。ここに、イギリスの誇る「パブ文化」は衰退して行ったのである。国民的な飲み物だったビターやエールは古臭い飲み物というような意識が若い世代にはあるようである。

また、日本同様にイギリスでも小売店の衰退が著しい。スケールメリット働かせて、薄利多売の経済効率重視で、小売店が軒並み閉店して、大型スーパーやフランチャイズ店が幅を利かせている。これに伴って、イギリスでは、「英国紅茶」は過去の風物詩で、ロンドンとは言わずもがな、地方でもスターバックスやカフェネッロなどのエスプレッソを売るチェーン店が雨後のたけのこのように現れた結果、ティーハウスなどは風前の灯で、アフタヌーンティーの習慣は完全に形骸化している。Elevenes という美しい響きも、紅茶に冷たい牛乳を入れて飲む習慣も、猫も杓子もアメリカ育ちのコーヒー屋に席卷されて、イギリス英語という言語に内包された紅茶文化は過去のものとなりつつある。

日本でも、3時のおやつは健在であるが、10時のお茶は廃れたであろうか。昔は、植木屋、畳屋、経師屋や大工に仕事の合間に10時にはお茶とせんべいを出したりしたものだが、この10時の「おやつ」も今ではすっかり廃れてしまったようだ。かつては見習いの女子社員を「お茶くみ」などという蔑称で呼んだこともあったが、男女同権の現代社会では既に死語である。オフィスにも大学の講師控え室にも、もはやお茶くみ係りなど居らず、自動給茶機で自分で汲む世の中となった。また、イギリスでも11時ごろにお茶を飲む人がいまだに多いのは Elevenes の名残りであろうが、プラスチック製のカップに自動給茶機でコーヒーを飲む人が圧倒的に多くなった。紅茶に冷たい牛乳を入れて飲む人を見つけるのは、今後ますます難しくなるだろう。

5.2 フランス

同様に、フランス国内でも、パリでは、カフェ文化が健在ではあるが、スターバックスが主要駅

の近くやオペラの辺りに出現し、紙コップで飲むお手軽コーヒーが少しずつ浸透してきた。従って、昔のような「インテリ」「エスプリ」という要素を内包するカフェ文化とは形を変えて、セルフサービス方式のコーヒー店と共存を余儀なくされるであろう。こちらも現在進行形である。

そうなってくると、個人商店や小売店で見られた「足し算でお釣りをもらう」というコミュニケーションは近い将来、見られなくなってしまうのではないかと危惧している。というのも、一昔前は、個人商店にはレジなどという計算機は存在せず、手のひらに足し算しながらつり銭をもらうのが普通で、コンビニ化が進んだ日本人観光客が、変に気を利かせて2ペンスや2サンチームなどの端数を紙幣と共に支払うと、引き算の観念の無い彼らには、無用の長物で、それもひとつの「異文化」であった。ところが、イギリスでもフランスでもスーパーではレジ会計なので、最近では「5サンチーム持っていますか？」などと逆に聞かれる始末である。日本と同じコンビニ化が著しい。

それでも、フランスでは、依然マルシェが元気である。農家や生産者が週に一度、決まった曜日に出店する市場で、ここでの買い物には、語学に内包された異文化がたっぷりしみこんでいる。卵一つ買うにも、発音の問題がついて回る。単数で *un œuf* という時は [œf] と発音するが、複数形になって *six œufs* (卵6個) という時は [ø] と発音する。そんな日常的なところにも、形態・音声と意味の関係において、フランス語の不思議がころがっている。バターを買うときも、*à la motte* 「バラ売りで」という表現は、マルシェでのみ聞かれるものだが、糸でバターを欲しい分だけ「これくらい？もうちょっと？」などとやり取りしながら買う様も、近い将来見かけなくなる日も来るのだろうか。

「おまけ」してもらったり、値切ったりできるのは、対面販売ならではの特権で、スーパーのレジで「おまけ」や値引きはありえない。前述のつり銭の話も同様で、マルシェや個人商店が元気なフランスには、アングロサクソンの大量消費文化が蔓延しないことを祈るのみである。

5.3 国境の町

二言語が接触する国境の町では、それぞれの異文化を内包しながら、独自の文化圏を形成している。スペイン・フランスにまたがるバスク地方がその典型で、パイヨンヌ以南では、フランス語に次いで、英語よりもスペイン語が優位である。ホテルの従業員の名札には話せる言語の国旗のマークが示されていて、フランス語に次ぐ言語は英語ではなくスペイン語である。また、これに加えて地域特有のバスク語も併記されている。これは、ストラスブールにおけるドイツ語および地域特有のアルザス語と同様で、二言語共存の歴史によってバスクもアルザスも純粋なフランスとは異なった経済ブロックを形成してきた歴史的な経緯を鑑みても、その独自性は明らかである。

辺境ほど昔の風習や習慣が維持されやすいとされているが、パリなどでは、フランスのスーパーでおなじみの野菜や果物の目方を自分自身で量り、いわば「自己申告」制で会計をするというカト

リック国の性善説に根ざした慣わしも、フランス国内からは消えつつある。アルザスやバスクも例外ではなく、スーパーが大手の経営に飲み込まれて、新しくなると、システムも大きく変わる。野菜や果物もレジの店員が目方を量る店が増え始め、野菜も果物も日本のスーパーのようにトレイにバックされた商品が並び始めた。いわば、性悪説に基づく人を信用できないという雰囲気も蔓延し始めている。それ以前にも既にその兆候は2003年ごろから見られ始め、それ以前までは、スーパーの果物売り場に並んだぶどうは、客が勝手に「味見」をすることができたのだが、2004年以降は「衛生上の理由」というもっともらしい理由で、「味見禁止」の貼り紙が出され、スーパーでぶどうのつまみ食いは禁止となった。以降はその貼り紙が撤去されても、誰一人としてぶどうのつまみ食いをする者は見かけなくなった。もう一つ、例を挙げると、フランスのスーパーでは、会計をする前にスナック菓子を店内で開封し、食べながら買い物をし、会計時には食べ終わった空の袋で会計をするなどという光景も見られたが、それも今は昔である。

他方、バスク地方でも、ピレネーを越えたスペイン側は、相変わらずのんびりしている。特に、タパスのメッカであるサン・セバスチャンでは、バル文化が健在で、カウンターに並んだ沢山のタパス料理（フィンガーサイズのおつまみ）をナプキンで自由につまんで、会計は自己申告制である。お店の人から逆に「飲み物は何？何個食べたの？」と聞かれる始末で、カトリック国の性善説がいまだに健在なのである。そのせいか、バイヨンヌ市内のタパスを出すバル兼レストランもどこかのんびりとしてはいるものの、伝票を使用して、しっかり客を管理しているところは、明らかにフランス的だ。

5.4 ヨーロッパにおける英語事情

二言語が接触する国境の町、フランスのストラズブルおよびドイツのケールでは、ファースト・フード店の店員やスーパーのレジ打ちの店員も独仏のバイリンガルが多い。ストラズブル中央駅の駅前のマクドナルドでは、ドイツ人旅行者が下手なフランス語でどうにか注文をし終え、店員に《À emporter?》と聞かれ、理解していないとみるや、フランス人店員が間髪を容れずに“Zum mitnehmen?,” と聞き返えすという光景をしばしば目の当たりにする。

また、ストラズブル国際空港に到着すると、到着ロビーへの案内板には、Arrivée と並んで、第二言語としてドイツ語で Ankunft と併記してある。そして、第三言語として申し訳程度に Arrival の英語表示が添えられている。

エールフランス航空の国内線機内アナウンスでも、パリ・ストラズブル間のフライトでは、フランス語によるアナウンスに続くのはドイツ語であり、最後に恐ろしいほどのフランス語のアクセントにまみれた到底英語とは思えないような「英語」でのアナウンスが流れる。

それに比べて、ロンドン・パリ間のブリティッシュ・エアウェイズの機内放送は、イギリス人の

客室乗務員が「英語」で生アナウンスをした後、録音によるフランス語のアナウンスが流れるという有様である。2003年ぐらいまでは、フランス人クルーも乗務していて、フランス語も生でアナウンスをしていたが、航空業界の冷え込みなどでフランス語のアナウンスはここ数年、ついに無味乾燥な録音となってしまった。まだエールフランスの下手な英語の方は、曲がりなりにも生のアナウンスである。

ところが、ここ最近、エールフランスの国内線のアナウンスに変化が見受けられる。パリ・ストラスブール間のフライトでも、ドイツ語が達者なクルーが乗務していない場合、ドイツ語の機内アナウンスは省略されるようになってきた。定点観測をしていると、その頻度が高くなりつつあるのが分かる。

と同時に、フランスにおける「英語」の地位が上がったのではないかという思いが強くなってきた。ひと昔前までは、フランス人は「英語」を分かっているくせに、わざと分からない振りをするという長年言われ続けてきたが、それはもはや時代遅れの認識だと言わざるを得ない。そもそも、大半のフランス人の「英語」に対する以前の認識は、第一次世界大戦当時首相だったクレマンソーの言った有名な《L'anglais, ce n'est jamais que du français mal prononcé.》「英語とは、拙く発音されたフランス語に過ぎない」という言葉に象徴的で、1066年のヘイスティングスの戦い以降に流入した英語の語彙の大半はフランス語由来のものであるから、フランス人にとっては、英語はフランス語が「訛った」ようなものである。事実、昔は真面目に勉強などせずとも、「英語」などはフランス人にとっては、適当に理解できて当然のものであったに違いない。従って、中高年以上の世代では、「英語」などは真面目に勉強する対象ではないものだから、本気で勉強などするはずもなく、そういう向きには「英語」を大雑把にしか理解できなかったから、「分からない振り」をしてごまかしていたとも言えるかもしれない。

しかし、40歳代より若い世代では、インターネット世代ということも手伝って、英語をまともに勉強してまともに習得している人も多く、フランスの大学生で英語が出来ないというものはほぼ皆無と言えるであろう。覚えてたのフランス語を使ってやろうと意気込んでフランスへ到着すると、英語上手のフランス人が日本人と見るや、得意の「英語」で話しかけて来た日には、出鼻を挫かれたような気になってくる。そして、ストラスブールのルイ・パスツール大学（2009-2010年の学年度から第1大学のルイ・パスツール大学、第2大学マルク・ブロック大学、第3大学ロベール・シューマン大学のストラスブール三大学が、ストラスブール大学として1つの大学に統合された）には、ヨーロッパ中から留学生がやって来ては、キャンパス内は全て「英語」で事足りる有様である。かくして、フランスでは近年、英語の地位が大いに上がったわけである。

他方、フランスにおける二言語接触という点では、南フランスのコート・ダジュール、とりわけニース以東では、イタリア語との二言語話者が非常に多い。特にイタリアに最も近いマントンでは、

ホテル、レストランは言うまでも無いが、小さな雑貨店、薬局、ファースト・フード店、アイスクリーム屋、果ては中華料理店に至るまで、イタリア語が通じる。そうなると、案内図なども、英語などは第三に退いて、イタリア語の地位が断然高い。ストラスブルにおけるドイツ語と同様である。

同じように、パイヨンヌ以南のサンチアゴ・デ・コンポステラへの巡礼のフランス側の出発点の一つであるサン・ジャン・ピエ・ド・ポールは、ピレネー山脈の麓にある町で、巡礼事務所は完璧なフランス語とスペイン語のバイリンガルである。れっきとしたフランスの国内であるこの町の商店やホテルは英語よりもスペイン語のほうが優位なのである。ピレネーを越えた最初のスペインの町ロンセスバジェスも同様に巡礼事務所をはじめ、町の商店やホテルは英語はあまり通じずフランス語が優位である。

森田（2009B）でも取り上げたが、フランスにおける英語の地位についても最新事情を述べておく。これは、現在進行形で変化しつつあるのだが、フランスの国内線、フランス高速列車などのアナウンスはフランス語に続いて英語のアナウンスである。ドイツ発着の国際列車は車掌が英独仏の三ヶ国語を話す、フランスの国内に関しては、2007年に開通した TGV 東線でさえ、ドイツ語のアナウンスはめっきり減った。代わって英語のアナウンスが定番になりつつある。ただし、いつ英語になったのかも分からないような100%フランス語のアクセントで発音する英語である。最後に、Thank you というフレーズを聞いて、英語だったのかとようやく分かるぐらいしばしば強烈な英語である。

よく一般に言われる「フランス人は英語が分かるくせに、わざと（意地悪して）分からない振りをする」という常識ももはや非常識となりつつある。特に、地元密着型の個人商店でない限り、旅行者が接触を持つような場所では、アジア人と見るや十中八九は英語で話しかけられる。そのくらいフランス国内における英語の地位が上がっている。これはインターネットの別の意味の功罪のメリットだろうが、ともかくフランス人も英語達者が増えたのである。相変わらず英語が通じないのは、スペインの地方へ行けば実感できる。アジア人相手だろうが、高速列車のチェックインでさえ、容赦なく早口のスペイン語でまくし立てられる。こちらは旧態依然である。

6. おわりに

大量生産・大量消費というアメリカ流のスタイルがヨーロッパを席卷しつつある昨今、フランスのパン屋でバゲットを買う時、手づかみで、中央に小さな紙をくると巻いて手渡してくれるようなことでさえ、わざわざ見物する価値が出てくる日も来るかもしれない。潔癖性気味の現代の日本人がこの場面を見ると、「パンの手づかみは衛生的でない」とか「きちんと包装してくれない」などと嘆く向きもある。しかし、この感覚のギャップこそが、異文化の魅力であり、もう一度、自国

の文化を見つめなおす絶好のチャンスでもある。日本では、デパ地下でフランスパンを買うと、トングを使って長細い袋に入れてくれ、さらに手提げの紙袋に入れてくれる。エコバッグ・マイバッグが流行しつつある日本社会だが、フランスパンに関しては、まだまだ過剰包装が依然として主流である。

日本はこのアメリカ流のスタイルに移行して高度成長時代以降、町から小売店が消え、大型スーパーばかりになってしまった。消費文化という切り口でものを見たとき、いわゆる先進国と呼ばれるアングロサクソンの社会をお手本にしてきた我々日本の社会において、底辺に流れるメンタリティーは、日本もアングロサクソンもほとんど変わりなくなってしまった。したがって、ギャップを見つけるとすると、異文化理解のテキストに見るような盲腸や化石の類ばかりが目につくようになってしまったのではないかと考えるのである。この現代社会におけるハイテクの時代、インターネットを通じて、海外ニュースもほぼリアルタイムで見聞きすることができるようになった現代日本では、英語圏はもはや異文化の色彩が薄くなって色あせてきたことは否めない。南米や東ヨーロッパは、我々にとってもまだ異文化の色彩を強く放っているのは対照的である。これを踏まえて考えてみると、大学の一般の英語の授業の教室で、「異文化理解」を取り上げる意義自体が薄れて来ているとも考えることができるのかもしれない。

習慣や風習の現在進行形で見受けられる変化というのは、テキストで取り上げるといことはなかなか難しい。毎年、版を新しくすることなど不可能であろうから。また、「イギリスの飯は金さえ出せば美味い」などという一般論的なことは、インターネットでもブログでも見つけられる情報であるが、フランスのスーパーの性善説から性悪説へのシフトというのは、問題はもっと本質的なところに潜んでいる。

スターバックスなどのセルフサービスのコーヒー店が増えると、フランスの誇るカフェのギャルソンたちはその職を失うことに繋がってゆく。カトリック国の性善説に根ざした「矜持」から、また、フランスのスーパーでは野菜や果物の量り売りは、購入者の「良心」から、各自が目方を自分で量り、いわば「自己申告」的な寛容さを持っていたのだが、最近では、特に都市部では、この制度が廃止され、会計の際に目方はレジ係が量るケースが著しく増えている。もともと、パリ市内のスーパーでは、以前からレジで目方を量るシステムを採っていた店も多く、これはカトリック国たる性善説の「矜持」を忘れ、高い商品を安い商品の値段で目方を量り、その差額を誤魔化そうとする不心得者が後を絶たなかったからだ。しかし、その根本は、サルコジ大統領がアメリカ型の自由競争へと舵を切りつつあるなかで、取り残されたものたちが生き残る術でもあった。スーパーやデパートなどの日曜・祝日営業も視野に入れた大きな波は、フランスの週35時間労働制度にも大きくメスを入れることになるだろう。こうして、スーパーの売り場からは、量り売りが消え、バックされた商品が並び、人件費の削減という大命題により、肉売りの担当者が消え、魚売りの担当者

が消え、チーズ売り場の担当者も消え、プラスチック製のトレイにパックされた肉や野菜、魚、チーズなどが並ぶようになった。スーパー売り場から店員がどんどん消えて行く。これは現在進行形の出来事である。

しかし、こうした事象を異文化理解という範疇ではなかなか取り上げることは難しいかもしれない。一つには、インターネットだけでは、こうした最新事情というものは得ることが出来ないからである。語学を教授するものは、積極的に現地での情報収集や定点観測、資料収集を行わなくては、現在進行形の変化を把握することは出来ない。語学を教授するものが、海外に出ないのは、むしろ怠慢でさえあると思う。

最後に、異文化理解と外国語教育の linkage として、以下のような提案をして本稿を締めくくりたい。現行の一般の語学の授業とは一線を画し、語学の要素を半分に減らして、必要最小限の文法と表現を学習しながら、異文化の「各論」に言及しつつ、国民性や精神性に触れるような「語学の授業であって、語学の授業ではない」新しい位置づけの科目（ヨーロッパの言語と文化）で、本稿で述べたようなことを取り上げ、授業で実践しようと思う。同時に、純粋な語学の授業で異文化理解に触れる場合には、「異文化理解」という大上段に振りかぶったスタンスを捨てて、昔の大雑把でざっくばらんな「海外事情のバラ売り」的な方法に復古してみるのも一つの有意義な策であることを提案しておきたい。

【附記】

本稿は、2008年10月25日に行われた東洋大学人間科学研究所の外国語教育研究チーム主催のシンポジウム「異文化コミュニケーションと英語教育」の司会を務めた研究チーム報告として、2009年3月発行の研究所の紀要に掲載されたもの森田(2009A)を大幅に加筆修正したものである。しかし、本稿の直接のきっかけとなったのは、2005年9月30日に行われた人間科学総合研究所主催の「大学における異文化理解と外国語教育」と題するシンポジウムであった。その司会を務めたのが故加藤治先生だった。異文化理解という視点で外国語教育を考察するきっかけを与えて下さったことに感謝をするとともに、改めて追悼の意を込め、本稿を故加藤治先生に捧げる。

参考文献

- 浅間正道 (2000) 「異文化理解のパラダイムシフト：意識改革への語りかけの視座」(浅間正道編著『異文化理解の座標軸：概念的理解を超えて』日本図書センター)
- 小西甚一 (2007) 「古文研究法」洛陽社
- 森田信也 (2009A) 「異文化理解と外国語教育」東洋大学人間科学総合研究所紀要 第11号研究チーム報告② 齊藤佑史『大学における外国語教育の現状と未来像』異文化コミュニケーションと英語教育 pp.77-81

- 森田信也 (2009B) 「英語・仏語・独語・ラテン語における小辞の振る舞いの通じの考察」『経済論集』第34巻
1・2 合併号 東洋大学経済研究会
- Ernout, A. et Meillet, A. (2001) Dictionnaire étymologique de la langue latine, Klincksieck
- Gaffiot, F. (2000) Le Grand Gaffiot: Dictionnaire latin-français
- Lewis, C.T. and Short, C. (1933) A Latin Dictionary, Oxford
- Varro, M.T. (1977) De lingua latina, (edited by Goold, G.P.), Loeb Classical Library
- Watkins, C. (1985) The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots, (revised and edited by Watkins),
Houghton Mifflin Company